



A humorous diary

hirotsugu ko

1日目

みなさん、こんにちは！

俺の名は、ジョニーだ！

俺はこのブログで、自身が体験した出来事を紹介していこうと思っているところさ。
ちなみに、これはあくまでフィクションだぜ...そのところは、ヨロシクたのむぜ！
と、言うことで、第一回目はこれで終了だ。

アディオス！

...

おっと、これで終わりじゃなかった...失敬。

では、気を取り直して、早速始めようか！

昨日、あるジュースの自動販売機に出会ったのさ...

そして、その自動販売機を見ると1枚の貼り紙がされていることに気付いたのさ。

すると、そこには、「飲まれます」と書かれていたのだ？

その不可解なメッセージを見て、俺は大いに悩んだのさ...

この自動販売機は、飲めないジュースでも売っているとでも言うのか？

そこで、気になった俺は、陳列されている商品を確認したが、どれもポピュラーなものばかりだった。

結局、何のことも、さっぱり理解ができないまま、とりあえず硬貨を入れることにしたのさ...

すると、硬貨が飲まれた...！？（汗）

つづく...

2日目

今日は、ある蕎麦屋に入ったぜ！

すると、そこの蕎麦屋には客の影はなく、ご主人が一人いるだけで、閑散としていたのさ。

もしかして、ここは、あまり流行っていない店だったか...

多少しくじった感があったが、とりあえず俺は注文することにし、蕎麦が来るのを待つことにしたのさ。

そして、数分後...

店の主人が現れ、蕎麦を運んできたのさ。

待っていましたとばかりに俺は、拍手喝采したのだが、あの親父...いきなりずっこけて、床に蕎麦を撒き散らしたんだぜ！

すると、その主人は、すぐさま雑巾を持ってきて、床を拭き始めた途端...

「チッ！」と、舌打ちしたんだ。

...自分でやらかしといて、しかも客をほったらかにして、舌打ちするな！？

と、俺は、叫びたかったが、ここはぐっと耐えることにしたのさ。

その後、俺が店を出るまで、ご主人は終始不機嫌で、口もきいてくれなかったんだぜ。

そんな些細な事で、あまり自分を責めなさんなよ...ご主人！

つづく...

3日目

ある日のことだ...

俺が、機嫌よく鼻歌を歌いながら、シチューを作っていると、1匹の大きなゴキブリがガス台の横の壁から現れたんだぜ！

すると、そのゴキブリは、じっとシチューを見つめているではないか...

俺は、ゴキブリを追い払おうと、すぐそばの壁を叩いて威嚇したのさ。

普通なら、蜘蛛の子を散らすようにして逃げ失せるものだが、そのゴキブリは巧みにフットワークを使って避けると、再び制止して、シチューを見つめてくるんだぜ！

そして、何度かその攻撃を試みたのだが、ゴキブリは視線をシチューから離そうとしなかったのさ...なんて、しぶとい奴だ！

しかし、さすがにこの煮えたぎった鍋の中には、入ってこないだろうと思ったのだが、その瞬間、ゴキブリは、鍋の中に飛び込んできたのさ...（どひゃあああ！）

まさに、飛んで火に入る夏の虫だぜ...ありがとう、ゴキブリよ。

おかげで、いい勉強になったぜ...！？

でも、結局、今日の晩御飯は、おかず無しとなり、ごはんのみそ汁だけになってしまったのさ...（しくしく...）

つづく...

4日目

俺は、YouTubeをよく見るが、特にこの映像がお気に入りなんだぜ！

(華麗すぎるカンガルーのドロップキック)

<http://videotopics.yahoo.co.jp/videlist/official/others/p0e91cb093239bb3433eb1325b4989d7c>

あと、びっくりさせられたのは、この映像だ。

(赤信号で横切ったとんでもないモノ)

<http://videotopics.yahoo.co.jp/videlist/official/others/p485a8f11f2252a66e0f5181cff968779>

おあとがよろしいようで...

つづく...

5日目

俺の友人に、ボブって言う、ナイス・ガイがいるんで紹介するぜ！

奴は、ある言葉の意味がわからないから教えてくれと聞いてきたのさ。

そこで、俺は、辞書で調べてみるよう勧めたんだぜ！

そして、奴は辞書を引いてみたんだ...すると、

「なあ...辞書には、こう書いてあるけど、これってどう言う意味なんだ？」

...辞書を使う意味が無い...！？

俺は、思わずつつこみたくなかったが、ならばそのわからない部分を辞書で引いてみたらどうだ...?と、新たに提案してみたのさ。

すると、奴は、3回ぐらい引き直して、ようやく解決にたどり着いたと喜んでたよ。

まあ、結果オーライって奴だ。

グッド、ジョブ！

つづく...

6日目

今日はとくに何もないので、少し前の話をするぜ！

その日の朝は、雪がちらついていた...

と、突然、日本海沿岸地域に住む友人から電話があったのさ。

すると、「たまには、遊びに来いよ」と、誘ってきたんだぜ！

だが、何メートル近くもの雪が積もっている中を、遠路はるばる訪ねるのは、相当大変なことだ。

「また、そんなことを言って、雪かきを手伝わすつもりだろう？」と、冗談を言うと、

「手伝わすつもりはないが、俺の家にたどり着くためには、雪かきをしないといけないから、同じことだけどな」と、返されたのさ。

...結局、雪かきをさせようと言う魂胆かい...！？

そんな訳なので、俺は、春の訪れを待ってから、奴の家へ遊びにいこうと心に決めたわけさ。

貴様の陰謀にハマられるほど、俺は愚か者ではないわ！

つづく...

7日目

今日は、このクソ寒い中を気合入れて、海釣りへ行ってきたぜ!

しかも、寝坊してしまったせいで、ポイントに着く頃には夜も白み始めていたけどな...

そこで、俺は、そのポイントである堤防に到着するやいなや、すぐさま竿を振って釣り糸を垂らし、釣りを開始したのさ。

すると、すぐに何かがかかったんだぜ!

俺は急いで、それを引き上げてみたんだが、何てことは無い、捨てられた釣り糸付きの釣り針が、びろーんと絡みついただけだったのさ。

とりあえず、俺は、それをゴミ袋に入れて、再び釣り糸を投げたんだ...

すると、またすぐに何か引っかかったんだぜ!

今度こそ釣れたか...と思ったら、糸の絡まったヨリモドシ（連結具）だった。

まったく、なんてマナーが悪いことだ...と、ぶつぶつ言いながら、俺は三度目のトライをしたのさ...

すると、例によって、また何か引っかかったんだぜ!

だが、引き上げてみると、ナス型のおもりが引っかかっていたのさ。

すると、その様子を見ていた隣の釣り人に、「一式揃ったじゃないか。もしかすると、それを使って釣れって、神のお告げじゃないのか?」と、冷やかされたんだぜ!

その激励を受け、

よし...ならば、望み通り、これらを使って釣ってやろうじゃないか...!?

ムキになった俺は、それを使ってセッティングし、海に投じたのさ。

すると...

凄いことに...

なんと...

奇想天外な...

まさかの...

サクセスストーリーが...

あるはずもなく、ものの見事に地球が釣れたとき...! ???

とほほ...今日もボウズか...畜生!

つづく...

8日目

今日は、ドライブだぜ！イエーイ！！

俺は、ルンルン気分で、愛車に乗り込み、国道へ出たのさ。

気分爽快で愛車を走らせていると右車線から、1台の車が颯爽と追い抜いていった...

と、その時、俺はぎょっとしたのさ！

...さっきの車には、助手席も、後部座席にも犬の姿しか見えなかったぞ...！？

まさか、犬の親子がドライブしているのか...！？

ちょうど、信号待ちとなり、その車の真横に止まることができたので、再びその車を確認したのさ。

すると、助手席に1匹、後部座席に2匹のゴールデンレトリバーが座っていたのさ...

そして、ごくりと生唾を飲みこみながら、運転席を確認すると、

...さすがに髭面のオヤジだったので、ほっと胸を撫で下ろしたわけさ。

まあ、犬のドライバーなんて、漫画じゃあるまいし...

つづく...

9日目

学生時代には、意外と一発ギャグのようなエピソードがあるものだ。

授業中、自分の物品に名前を書くことになり、マジックペンが必要となった時の話なんだけどさ...

その際に俺は、ボブに対して「マイネーム（商品名）を貸してくれないか？」と、尋ねた。

すると、何を思ったのか、奴は自分の名札を手にとって渡してきたんだぜ！

...そのマイネームじゃない...！？

しかし、ここまで、ナイスボケをかましてくれる人は、そう多くはいない...

それに、周囲の友人たちも大爆笑で、なかなかの大盛況だぞ！

俺は、良き友人に恵まれたことを神様に感謝をしたのさ。

アーメン...

つづく...

10日目

接客業でカミカミと言うのは、如何なものであろう...

何気なくコンビニに入ると、

「いらったいませ!？」と、その店員が、いきなりかんだ...

俺は、とても気になったが、とりあえず聞かなかったことにして、弁当のコーナーに向かったのさ。

すると、「今、おでんがやすくなっとう。どうでしか!??」と、またかんだ...

そこで、俺は思ったのさ。

...お前の方こそ、どうなんだ...!?!?!?

最後に会計を終わらせた後、「ありがとうございました!???

と、この店員は、最後の最後までかんでいたんだぜ!

...狙っているのか、お前!?

俺は、そう思いながら、そそくさと、そのコンビニを出ることにしたわけさ。

まあ、今日はそんなところだな...

つづく...

11日目

今日は、小学生の時までさかのぼってみたいと思うぜ！

ある日、友人たちと一緒に塾から帰るため、やって来た電車に乗ろうとしたのさ。

と、その時、ボブが、地面に何かが落ちていることに気がついたんだぜ！

「十円、めっけ...」

奴は、迷うことなく、その十円を拾った...と、次の瞬間、電車のドアがボタンと閉まったのさ。

「やべえ...。あいつ、乗り遅れてしまったぞ！」

既に電車へ乗り込んでいた俺たちは、びっくりしてドアに近寄ったのさ。

「あけてくれ！」

奴は、外からドアを、ドンドンと叩いたんだぜ！

だが、無常にも、電車はそのまま発車してしまったわけさ。

欲の皮が突っ張りすぎると、このような悲劇が起こるのは、世の常なのか...

つづく...

12日目

たまには、菓子でも買おうと思い、コンビニへ行くと、昔懐かしの「うまい棒」を発見したんだぜ！

そう言えば、子どもの頃、10円を持って近くの駄菓子屋に通いつめて、よく買ったものだと、ふと、ノスタルジックな気分になったのさ...

あの頃は、メンタイ味とサラダ味、サラミ味ぐらいしかなかったのだが、今は種類がかなり増えているのにびっくりだぜ！

俺は、久しぶりに、それを手にとってみた...

すると、子どもの頃に解決できなかった問題をふと思い出したのさ。

...このパッケージのキャラクターは、ドラえもんのパクリなのかどうか！？

嗚呼...この問題は、解決不能な問題として、永遠に封じ込めたかったのに...

どうやら、今日も睡眠不足になりそうである。

合掌...

つづく...

13日目

車で街中を走るほど、憂鬱なことはいないんだぜ！
とくに、中途半端に栄えている街は、じつに鬱陶しい...

ある日、俺は、とある交差点で、左折しようとしていたのさ。
だが、横断歩道を渡ろうとする歩行者がいるため、彼らが渡り切るのを待つしかなかったのだが、
...なんで疎らに渡ってくる！
...しかも、一人が渡り終わると、自分の順番がきたと言わんばかりに、また別の奴が渡ってくるんだ！
しかし、彼らには、何の罪もないので、苛々しながら、さらに待ったのさ。
すると、人の波の切れ目となるであろう最後の一人が渡り終えようとしたのさ。
...チャンス！
と、思って、アクセルを踏もうとしたが、急にその男は、マイケル・ジャクソンを彷彿するようなムーンウォークで滑らかに引き返してきた。
...あぶない！
俺は、すぐに急ブレーキを踏んで止まったのさ。
すると、彼は、横断歩道の中ほどで携帯電話を落としたらしく、それを拾うと、何事もなかったかのように渡っていったんだぜ！
まあ、大事には至らなかったから良かったわけだが、結局、歩道の信号が赤に変わるまで待つことになったのさ。

と、去り際に、俺と目が合った奴は、こう声を発したように聞こえた...

「who's back！」
...イヒッ！（by 旭化成）

つづく...

14日目

また、子どもの頃のボブの話だぜ！

俺とボブは、とあるデパートのおもちゃ売り場へむかおうとエレベータに乗ろうとした時のことだ。

目的地は、8Fにあるのに、ボブは「下」ボタンを押したのさ。

...「下」じゃなくて「上」だろうが！

俺は、とことん彼に問い詰めたんだぜ！

すると、「1Fは、8Fより下の階になるから、「下」を押すなんじゃねえの？」

その答えに、空いた口が塞がらない俺は、躊躇することなく叫んだ。

「お前は、一休さんか...このしれ者が！」

つづく...

15日目

俺、実は大学へ行っていた時があるんだけど、
今日は、その時の話をするぜ！

それは、大学祭のことだった...

そこに沖縄県人会のブースがあり、彼らは、伝統芸能である「エイサー」を披露してくれたのさ。

そのおかげで、大学祭は大盛り上がりだったわけで、ここまでは良かったのだが、

彼らは朝っぱらから、残波を片手に飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎ状態だったので、同じ大学の学生を見つけては絡んで、次々と酒を飲ませていたんだぜ！

そのため、俺は、べろんべろんに酔っ払い、ついに大学のキャンパスに大の字になって寝ちまったのさ...

そして、気が付くと、次の日の朝になっていたんで、びっくりして飛び起きたら、周りにはもの凄い数の同じ大学の連中たちが大いびきで寝転がっていたんだぜ！

あれを見た途端、俺は新聞に載るな...と思ったのさ...

「〇〇大学の学生、キャンパスで集団自殺か...!？」

...なんちゃって。

つづく...

16日目

また、大学の時の話だ！

寒風吹き荒れる冬の季節に、東北の方までドライブに出かけたのさ。

みんなで交代しながら運転したわけだが、さすがに遠すぎて、みんなくたくたに疲れ切ってしまったんだぜ！

それで、どこかで仮眠を取ろうと言う話になり、とある道の駅に止めて休憩を取ることにしたのさ。

車の中だし、そんなに眠れないだろうと、たかをくくっていた俺たちは、そこでの仮眠を10分から20分ぐらいで考えていたんだけどさ、

...全員、熟睡状態となったわけだ

...しかも、エンジンをかけたままだぜ！

だが、幸運にも、同じ道の駅へ入ってきたあるトラックの運転手が、そんな俺たちを見つけ、血相を変えながら激しくドアを叩いて起こしてくれたわけさ。

自動車の構造は、排気ガスが直接室内に入り込まないようにになっているが、100%安全と言うわけではない。

長距離運転をする際は、毛布などを車に積んで、仮眠をする際はエンジンを切って、それに包まって寝ましょう...

昔の良き時代の日本が、そこにはあった...と、俺は、肌身を感じたわけさ。

あの時は、世話になったぜ！ 運ちゃん！

つづく...

17日目

ある日のこと、だぜ！

愛車を走らせていると、とある交差点で、反対車線にいる目の前の車が右折しようとしていたのさ。
よく見ると、その車は、ハザードランプをチカチカさせていたのだった...

・・・ ?q|° ㏑ |p

つづく...

18日目

今日は、俺のアパート周辺に住む野生生物たちとの関わり合いを話すぜ！

そのアパートに初めて入居しようとした時のことだ。部屋のドアを開けた瞬間、蚊の大群がこちらの様子を伺うかのよう
に俺を睨みつけてきたのさ。驚いた俺は、すぐにドアを閉め、ホームセンターでバルサンを購入し、その部屋に投げ
込んだのさ。当然、部屋から蚊たちは居なくなった訳だが、その日は部屋の中に入ることができず、車の中で就寝する
ハメになったんだぜ…なかなかの歓迎ぶりだろ！

だが、野生生物たちとの戦いは、まだ終わってはいなかったのさ。

それから一週間で経たない内に、アリンコが大発生だぜ！

仕事帰りで疲れているのに、またバルサン解禁で、車内就寝かよ！

しかし、背に腹は変えられないから、意を決してやってやったのさ。

でも、彼らの執拗な攻撃は、まだまだ止まらない…

舌の根も乾かぬうちに、今度はムカデが部屋の中を大行進だ！

こうなったら、バルサンの数を増やして徹底的に死滅させてやる…そう思い立った俺は、バルサンを2個同時使用を決行
したのさ。おかげで、当分はその部屋に入る気がしなかったのさ、2、3日は車の中で寝ると言う生活を送ったもんだ…
だんだん、車中就寝にも慣れてきたぜ！

こうして、ようやく落ち着いて部屋で寝られると思ったわけだが、それはとんでも無い話だった…その日の夜、アパー
トのドアを開けると、部屋の真ん中に大きなアオダイショウがとぐろを巻いているではないか！

…何だ、この部屋は…どこかに大きな穴でも開いているんじゃないのか…それよりも、こいつには、バルサンが利く
のか？

思案した末、俺は、奴が居座る周辺の床を箒で叩いて追い払ったのさ。あの時は、結構な労力を費やしたもんだぜ！

まあ、色々とすったもんだがあつたが、あの大蛇発生事件後は、何事も無くなり、ついに俺の部屋は平和そのものとな
ったわけだが、それから一か月後…近くの海でクーラーボックスに座って釣りをしていたら、ふいに背後からお散歩中
の犬が襲いかかり、俺の頭をベロベロと舐め回し、髪の毛をぐちゃぐちゃにしやがったのさ…

動物なんか、嫌いだ！

19日目

今日は、真夏の高速道路を走っていた時の話だ！

あまりにもクーラーが利かないので、窓を全開にして走ったのさ…結構、きつめの風が車内に吹き込んできて、中々乙な物だぜ！

と、突然、ふいに前の車が急ブレーキを踏みやがった。俺も、慌てて急ブレーキを踏んだわけだが、その拍子に窓側に取り付けていたドリンクホルダーに置いていた携帯電話が、ポンと車外に飛んでいっちゃまったのさ…

…工工工IIIIIIIIIIII(° ㏒)IIIIIIIIIIII工工工…

20日目

今日は、会社の同僚が、急に寿退社すると言いやがった…

て、言うかお前、男だろ！

何だよ、寿退社って！

すると、彼はこう言った…

「婿養子になって辞めるから、寿退社だ」

…ホーン(皿)ㄣㄣㄣㄣㄣㄣ…。……。ㄣㄣㄣ…

21日目

今日は、とんだ厄日だったぜ！

スーツをびしっと着込んで、とある館内を歩いていると、徐々にかかとか沈んでいく感覚が伝わってくる…

何だか変だぞ…ふいに足下を見ると、ぱっと見では、それほど違和感はない…が、視線をかかとより後へ移すと、黒い破片のようなものが散乱している…

ぎょっとした俺は、靴の裏を見たのさ…すると、靴のかかとかがぐちゃぐちゃに大破しているではないか…

…(ノ▽`)ノ▽`)ノ▽`)ジエトストリームアチャ-

22日目

この地にやって来て間もない頃、汚れが目立つ布団を見て、干すだけじゃ綺麗にならないから、洗ってやろうと思いついたのさ。だが、一人暮らしの洗濯機では、到底入りきらない…

そこで、俺は近くにあるクリーニング店へ布団を担いでいったのさ。すると、

「お布団のクリーニングですか」

アルバイトのお婆さんが、突如固まる…どうやら、アルバイトをやり始めて日が浅いため、布団を取り扱うのは初めてらしい…

「どうやって、入力したらいいのかしら…ちょっと、教えて頂戴」

レジの操作でパニックになるお婆さんを見て、

…俺に聞かれても、困るつつうの！

と、思ったが、ここは近所付き合いだと思い直し、一緒に考えながら、この難局を乗り切ったのだった…

月日は経ち、また布団を洗わないといけないハメとなった俺は、再び布団を担いでクリーニング店に向かったわけだが、

「久しぶりに取り扱うから、やり方忘れちゃった」

と、お婆さん。

…ひょっとして、俺以外に布団を持ってくる奴はいないのか？

様々な憶測が脳内を飛び交う中、再び一緒にレジ操作の検討したのだった…

23日目

今日は、アパートの隣人の話だぜ！

そいつは、マイカーを持っているが、通勤時は電車を使っていたんで、ほとんど車を動かす機会が無かったようだ。

「たまには、エンジンをかけないと動かなくなるからな」

休日なのに色々忙しかったのか、ドライブに出られないため、駐車場に置いているマイカーのエンジンを掛けっぱなしにして、違う用事をこなしていたらしいのさ…

…で、どうやら彼は、エンジンを掛けっぱなしにしていたことを忘れていたらしく、長い長い時間、放置した結果…エンスト！

ふいに、俺の部屋のインターホンが鳴った。

「おい…すまんが、バッテリーチャージさせてくれんか」

これが彼との出会い、そして、始まりだった…

24日目

今日は、とてもファンキーな奴らと遭遇したぜ！

俺は、見晴らしの良い直線の道路を、愛車に乗って気持ちよくドライブしていたのだが、前を走っていた車に追いついたため、二台の車が縦に並ぶ構図となったのさ。

ここまでは、まったく問題は無かったのだが、次の瞬間、前を走っていた車の前方に一人の男が「お〜い！」と叫びながら、急に道路へ飛び出してきたのさ。

…うそだろ！

その突然の出来事に、前の車もそうだが、俺は慌ててフルブレーキングしたんだぜ。結果、なんとか、その男をひかずに済んだ訳なのだが、あまりのことだったので、俺は怒りの抗議をするべく、車から降りようとした…その直後、さらに仰天させられることが起きたのさ。

「開けろ！」

なんと、飛び出して来た男がそう強請りながら、前車の後部座席のドアノブを、何度も引っ張り始めたではないか…さらに、そのドアが開き、彼が飛び乗ると前の車は何事も無く、そのままどこかへ行ってしまったではないか…

…お前ら、友だちだったのかい！

…いくら友だちの車だからと言っても、走っている車の前に飛び出して無理やり止めるのは危険なので、絶対に止めましょう…以上…

25日目

二泊三日の気ままな一人旅をしていた時のことだ。

早朝、ホテルで用意されている歯ブラシを使って、歯を磨いていると、何だかわからないが、次第に口の中が「もしやもしや」してくる…

奇妙な感覚に、俺は口の中に入れていた歯ブラシを取り出して確認したのさ…すると、歯ブラシの毛が半分くらい抜けているではないか…

…欠陥品かよ！

俺は心の中で、そうツツコミを入れた訳だが、あることに気付いたため、すぐに冷静さを取り戻したのさ。

…旅は、二泊三日だ。次の目的地にある別のホテルで、もう一泊しなければならない…もしかすると、また、同じ災いが降りかかってくるかもしれない…

俺は、前もってホームセンターで歯ブラシを購入することに決めたのさ。

…これで安心だ！

ところが、事態は意外な方向へ向かっていく…

二軒目のホテルには、そもそも歯ブラシセットが用意されていなかったのだった。

「最近、歯ブラシセットを持ち込んでくるお客さんが多いからね」

…だから、用意してないんかい。それならそうと、先にそれを言っといてくれよ！

次の朝、俺は、コンビニで歯磨き粉とミネラルウォーターの入ったペットボトルを購入し、公園で歯を磨いたのだった

…ちゃん、ちゃん…

26日目

今日は、俺のマイハニーが起こした珍事件をバラしちゃうぜ！

マイハニーを助手席に乗せて、長距離ドライブのデートした時のことだ…

「そろそろ疲れたでしょ…運転代わろうか？」

…なんて優しい奴なんだお前は…

その言葉に感動した俺は、快く彼女と交代した訳だが、よくよく考えてみると…

…こいつ、免許を持っていたっけ？

俺は、夢中になって運転する彼女に問いかけると、

「えっ…同乗者が免許を持っていたら運転できるんじゃないの？」

…できるわけねえだろ！

俺は、慌てて車を止めさせ、運転を代わったのさ。

「ちっ…もう少し、運転したかったのに」

悔しがる彼女を横目に、俺は「いつか別れてやる」と思った訳だが、何故か未だに交際は続いている…

さて、こんな調子で、もう一つバラしちゃおうか！

長距離ドライブをした後、帰りに買い物を済ませて帰宅しようとしていた時のことだが、不覚にもガス欠させてしまったのさ。JAFを呼ぼうかと思ったが、ガソリン用の携行缶を持っていたので、

「確か、この近くにスタンドがあるから、ちょっとガソリンを買ってくるぜ」

と、俺が、携行缶を持って車外へ出ようとしたのだが、

「そんなことをしなくても大丈夫よ…これを使えば、ちょっとは動くわよ」

と、彼女は、とっさに買い物袋からサラダ油を取り出して見せたのさ。

…動くわけねえだろ…て、言うか、車が壊れるつつうの！

心の中で発狂しそうになった俺は、今度こそ「別れてやる」と思った訳だが、何故か未だに交際は続いている…

27日目

今日は、午後から法事があって、そこへ参列した訳だが、その時にちょっとしたハプニングが起きてしまったんだぜ。

その日の朝食で、熱々のうどんを食べた際に口の奥側を火傷してしまい、水膨れみたいなのができてしまったのだが、それが法事の最中に何らかの弾みに潰れてしまった訳だ。

痛みは少しあったが、所詮は水膨れ...こんな物ごときに狼狽える俺ではないぜ！

と、思ったそばから、口内で結構な出血が起こったのさ。

俺は、必死にそれを飲み込もうとしたが、水膨れが微妙な位置にあったため、うまく嚥下することができない...不覚にも、俺の口から一途の血が流れ落ちてしまった訳だ。

すると、事情を知らない親戚陣は、仰天して辺りは混乱状態に陥ってしまったのさ。

「おい、大丈夫か。誰か、すぐに救急車を呼べ！」

「お寺に救急車を呼ぶ気か！」

「だったら、霊柩車を呼んでこい！」

「て、言うか...まだ、死んでないつつうの！」

はい、すみません...私が悪うございました。

28日目

話はかなり遡るが、パソコンが普及する前後の時のことだ。

俺は、パソコンの操作を習うため、カルチャースクールに通うことにしたのさ。そこで、初心者向けの講座を受けたのだが、その教室に来ていたおぼちゃんの奇行に仰天させられてしまったぜ。

講師がパソコンに指差し、

「それでは、立ち上げて（パソコンを起動して）ください」

と指示すると、

「はい」

そのおぼちゃんは、ふいに立ち上がった。

...お前が立ち上がってどうするんだ。

29日目

今日は、俺がボブと一緒にラーメンを食いに行った話をするぜ。

とあるラーメン屋に入って、ラーメンと餃子の注文を済ませたのだが、急に腹の調子が悪くなって、トイレに駆け込むハメになった訳だ。

しばらくして、ようやくトイレから脱出した俺は、急いで自分の席に戻り、ボブと再会したのだが、そこには、空っぽになったラーメンどんぶりや餃子の皿が二つずつ置いてあるではないか

。

「おい、俺のラーメンはどこにいった！」

「お前が余りにも遅いから、伸びる前に食べてやったぜ」

「餃子は！」

「ついでだから、食べた」

その後、取っ組み合いになったのは、言うまでもない...

30日目

俺が、大きな池のある公園に行った時のことだぜ...

その池にはたくさんの鯉が群がっていて、売店で餌になる棒状の麩が売られていたのだが、その公園に隣接する川辺に白鳥が優雅に泳いでいるのに気づき、無性にそっちの方へ興味が沸いた訳だ。

そこで、俺は購入した麩を白鳥に与えてやろうと川へ向かい、適当な大きさに割って白鳥のいる方へ投げてやったのさ。

すると、すぐさま白鳥はそれに気づいて食いついてきた...なかなかの食いつきぶりに感心した俺は、次々と麩を割っては投げてやった訳だが、やがて白鳥はだんだんこっちに近づき、陸を上がって来た。そして、こっちをじっと見つめて来たのさ。

どうかしたのか？

と、その束の間、つかつかとこっちへ向かって来ると、ふいに麩を持っていた俺の手に被りついてきた訳だ。

いてえ、白鳥に噛みつかれた！

出血までには至らなかったが、手が真っ赤になっちゃったぜ。

その後、白鳥は何食わぬ顔をして川へ戻っていったとき...白鳥の意外な一面を垣間見ることができたぜ！

俺は涙目になりながら、その場を去ることにしたのだった。

31日目

ここで、ジョニーから、突然の告知だぜ...

みんな！

残念なことに、とうとうネタが思い浮かばなくなっちゃったぜ！

...と、いうわけで、今日でお別れだ！

また、どこかで会おう！

あばよ！（柳沢慎吾調）

おしまい...